

近藤啓吾著『續々山崎闇齋の研究』

牛尾, 弘孝
大分大学

<https://doi.org/10.15017/18158>

出版情報：中国哲学論集. 21, pp.101-112, 1995-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

近藤啓吾著『續々山崎闇齋の研究』

牛 尾 弘 孝

前著『續山崎闇齋の研究』（平成三年、神道史学会）に引きつづいて執筆された本書によって、『山崎闇齋の研究』正・續・續々の三部作が完成し、闇齋における朱子学の意味と神道の本質とが解明されることとなった。以下各篇ごとに内容の要約を試み、最後に評者の見解を附してみたい。

一

先ず本書の目次をあげると左記の如くである（便宜上、通し番号を附した）。

序に代へて

緒説

（一） 天皇の御祈願

（二） 山崎闇齋に於ける『中臣祓』

（三） 山崎闇齋と『古語拾遺』——神器は三種か二種か——

（四） 三種神器説の展開——後繼者栗山潜鋒——

(五) 山崎闇齋と庚申——「教へは猿田彦神の教へ」考——

(六) 續心神考

(七) 山崎闇齋の漢詩

(八) 山崎闇齋の葬儀

(九) 山崎闇齋に於ける朱子學

(一〇) 大山爲起著『倭姫命世記榊葉抄』について

(一一) 『若林強齋の研究』補遺——藤井左平太・梅津共軒・當舍修齋——

(一二) 『望楠軒夜作』に思ふ

(一三) 寶曆の變

(一四) 寶曆變餘響

(一五) 川島栗齋所講『論語講義』について——崎門朱子學概説——

(一六) 山鹿素行の神道説——『中朝事實』成立考——

略年譜

索引

跋

二

(一) 天皇の御祈願

御一身のことは顧みられず、ただ「世治まり民安かれ」とひたすらに国の平和と民の幸福を皇祖皇宗に祈りつづけてこられたのが、わが歴代天皇の御姿である。闇齋の心を動かし、神の存在（靈魂の不滅）を確信せしめたのは、彼れが神道の古典によってそのことを知るとともに、現天皇が古のままにその御祈りをつづけておられる事実を拝した

からにほかならない。天皇の御祈願は、歴代天皇の御製歌に端的に知ることができるのである。

(二) 山崎闇齋に於ける『中臣祓』

闇齋は寛文九年（一六六九）、五十二歳のとき、伊勢において大宮司河辺精長（一六〇一—一六八八）より、『中臣祓』の伝を受けている。それ以後、伊勢神道の説は闇齋の神道思想（垂加神道）の中核をなしてゆく。『神代卷』と『中臣祓』は、神道における二大聖典であり、伊勢神道および吉田神道においても、最も重要視されているが、『中臣祓』における「祓」の解釈は、伊勢・吉田・闇齋において、それぞれに違いがある。吉田神道においては、一切の災難をはらい、一切の福祿を求めるという現世利益的な要素が強い。これに対し伊勢神道においては、わが身の罪とがを自覚し、神に祈ってわが身の不浄をはらい清めるという対自的な要素が強い。闇齋はこの伊勢の内省的な自己悔悟を受けつぎながら、さらに独自の把握を加えている。それは「祓」というものが、決して個人的な領域にとどまるものではなく、国家的な領域、すなわち上は天子から下は臣下臣民に至るまで、君臣一体となつて、一切の罪やけがれをはらい清めさせてこそ、わが国の悠久を確立することができると思へられたことである。そのために闇齋は『中臣祓』の註解である『中臣祓風水草』三巻を著わし、その門流は『風水草』を垂加神道最高の伝書として尊んだのである。ただこの書は広汎な書籍からの引用で埋めつくされ、必要に応じて最小限度の注釈がつけ加えられているだけであるから、その内容理解は極めて難かしい。その意味では、闇齋没後、その意の深奥をうかがい得た唯一の学者である再伝の門人若林強斎の『中臣祓師説』によつて、簡明適切に垂加神道の本質を知りうるといつても、過言ではないのである。

(三) 山崎闇齋と『古語拾遺』——神器は三種か二種か——

天孫の降臨に際し、天照大神が玉・鏡・剣の三種の神器を授けたことは、『日本書紀』神代卷に明記してあり、それは『古事記』の記述も等しい。しかし『古語拾遺』には、神宝を鏡・剣の二器とし、玉については「自ら従う」という記述になっており、この「自從」についての解釈が難解なこともあるが、本居宣長が『古事記伝』十五之巻にお

いて、鏡・剣が神宝の主体であつて、「玉はただ何となくそれに添へて賜へる由なり」と解しており、『古語拾遺』は二種の神器を皇位継承のしるしとするという説が定着することとなつた。この神器は天祖（皇祖）の神靈のよりしろともなるものであるから、神器が二種なのか、三種なのかということは、日本国家の命脈に関する重大な問題をはらんでおり、闇斎はこの相違の解明に苦心することになつたのである。闇斎の学問の態度の厳密性は、どのような問題の解釈にあたつても、なしうる限り博く資料を求めて、これを公平な態度で整理し、その上に立つて深思していることにある。『古語拾遺』についても、通行本（嘉禄本）、異本（亮順本）、北畠親房の『元元集』などの諸本を考定し、最終的には通行本に従い、その本文を『風水草』に引用するに至つてゐる。闇斎は自身の意見を表に出すことを極力おさえ、関連の資料の記述を並記することが常であるから、門流たちの講説書を媒介して闇斎の考えを知りうることが多い。闇斎の高弟正親町公通の「正親町公通卿口訣」、同じく公通の門人跡部良顕の「三種神器極秘伝」などによつて、闇斎自身の「十種而三種、三種而二種、二種而一種也」（『風水草』）の言は、三種の神器が玉の一つにつづまると理解するのである。すなわち宝玉は天皇の御身をはなれたことがないので、まさに玉体と一体（「自従」の意）であり、玉の明らかなる徳を鏡とし、その蔽なるを剣としたものであつて、『古語拾遺』の記述はむしろ玉を中心としたものであることを知らしめるものであつた。この「自従」の語の解決に糸口を与えたのが、『元元集』神器伝受篇の「自従而不改」という親房の意見だったのである。

（四）三種神器説の展開——後繼者栗山潜鋒——

栗山潜鋒（一六七——一七〇六）は、水戸光圀に仕えて、『大日本史』の完成に大功のある一人であつた。また『保建大記』を著したことによつても名を知られている。潜鋒の師鵜飼鍊斎も桑名松雲もともに闇斎直門で、貞享元年、十四歳のときに、鍊斎の推挙により、同じく十四歳であつた八条宮尚仁親王の学友として親王に近侍することになった。潜鋒が元禄元年、十八歳のとき、親王に献じたのが『保平反正録』（のちに水戸に仕へて補訂を加え、『保建大記』と改めている）である。さらに元禄六年、二十二歳のとき、師鍊斎は潜鋒を水戸藩に推挙し、光國の篤い信頼を受け、史臣として、修史の事業にあたつた。しかし宝永三年、三十六歳という若さで生涯を終えたが、『保建大記』

の神器論を通して見ても、潜鋒は閻斎の後継者とも言えるもので、閻斎の最晩年の弟子谷秦山たにじんざん、閻斎の再伝の弟子若林強斎の兩人は、『保建大記』を絶賛してやまず、下つては幕末の水戸藩において、藤田幽谷が出るに及んで、潜鋒の尊皇論は藩の指標となつて復活してゆくのである。『保建大記』は、保元・平治より建久に至る三十余年間に、王朝政治から源頼朝の武家政治へという大変革が起つた原因を記している。さらに神器に関しては、閻斎の「三種の神器は玉の一つにつづまる」という説を受け、神器は天祖が天孫に授けて皇統のしるしとしたものであり、それは天祖の神霊のよりしろとなるものだから、天祖・神器・今上は三者一体であると断じている。このことより神器なき北朝は正統ではないという史論が展開されることとなつた。

(五) 山崎闇齋と庚申——「教へは猿田彦神の教へ」考——

猿田彦神さるたのこのかみは、『日本書紀』・『古事記』に天孫の道案内をつとめる御神みかみとするところから、漢土の道祖神と習合せられて、旅行者の守り神として信仰されるようになり、近世に入り、庚申信仰のなかで猿田彦神が祭られ、人々に幸いを賜わるといふ現世利益の神となつた。闇斎は俗信としての庚申信仰と『紀』・『記』の記述に見える猿田彦神とを明確に区別している。それは闇斎の「道則大日靈貴之道おほひるめむち、而教則猿田彦神之教也」(『風葉集首巻』)によつて知ることができ、その「教へは則ち猿田彦の教へなり」といふ「教へ」の内容が重要となる。その「教へ」とは、猿田彦の皇孫御先導の一事ということである。すなわち猿田彦神は皇孫の先驅として艱難を押しひらき、先導申しあげることをみづからの責務とするのである。これは闇斎に日守木(ひもろぎ)となつて皇統の護持に任ぜんとする覚悟を教えるものであつた。

(六) 續心神考

闇斎いんぺいは忌部正通いんべのまさみちの『神代口訣じんたいくけつ』のなかに「心神」といふ語を発見することによつて、自己の神道説(垂加神道)を大きく前進させることになつた。「心神」の語、すでに伊勢の神道五部書やまとのめのかこせいきの『倭姫命世記』などに見えているが、この「心神」といふ語によつて、闇斎は神と自己の魂との相関、すなわち心神はわが内なる天神(天人一貫・神人一貫

ともいう)であって、祖神の霊と自己の霊とが、ひとつながりの生命の流れのなかにある(祖孫一体)という信念を持つに至ったのである。しかしこの「心神」という語が、儒仏の書によって偽作したものであるという非難は、若林強斎(一六七九—一七三二)と同時代の吉見幸和(一六七三—一七六一)が『五部書説弁』に論証して以来、今日に至るまで絶えることがない。「心神」の語はすでに『万葉集』に見えており、『今昔物語』の仏法説話中にもあり、中国においては、『三国志』(蜀志・関羽伝)や『魏書』(釈老志)などにも認めることができるが、いづれも「心の神」の意ではなく、二字で一語として、「こころ」の意に用いられている。しかし伊勢の神道五部書のなかに現われた「心神」の語の訓読は、「こころ」・「たましい」で、「心の神」とは訓んでいなかったようであるが、仏教思想の影響を受け、「心仏」の語に示唆を得たのであろう、「神の宿らるる心」という新しい意義を附与したのである。その意味で、閻斎に伊勢神道の本質を伝えた伊勢の外宮祠官度会延佳(一一六五—一六九〇)が、その『神代卷講述鈔』において、「心ノ神」と訓んでいるのは自然なことであった。かくの如き神道思想展開の事実を無視して、ひとつの語だけを取りあげて儒仏の書によって偽作したものであるから、伊勢神道は、わが国の真の神道ではないというのは、たとえば伊藤仁斎や荻生徂徠が朱子学を批判するのに、老莊や仏教の語を用いているから孔子の真意を得ていないと非難するのに等しいものである。

(七) 山崎闇齋の漢詩

闇齋は五、七言の絶句・律詩・古詩はもとより、長短句、四言詩、騷体とあらゆる体に挑戦して臆するところがない。しかし闇齋がもつとも尊んだのは『詩経』の四言詩であり、次に悦んだのは蘇武・李陵、陶淵明、朱子の『感興詩』などの五言詩であった。それは闇齋の意識の奥に、古代への強きあこがれがあったのであり、これはすなわち彼の『神代卷』に抱いた思慕とその質を一にするものである。

(八) 山崎闇齋の葬儀

闇齋はその晩年、神道に深く心を寄せながら、みづからの葬儀については、神道の儀礼をもってこれを行うことを

遺言していなかった。当時は厳しい寺請制度下にあったため、遺体は門下の手で極秘に、朱子の『家礼』の制に準じて墓穴におさめ、全く僧侶の手に触れさせずして埋葬をすませた。一方、葬儀の方は、虚乗物（からもの）を用意して寺に運び、僧侶による仏式の葬礼を受けた。かように江戸時代を代表する思想家閻斎の葬儀としては、極めて淋しいものであったが、これこそ生涯孤高の哲人であった山崎闇斎の真姿を物語るものである。その最後に伴った門人でさえ、師の最後の心を理解した人物が、はたしていく人あったかは疑わしいものであり、その意味では閻斎の再伝の門人である若林強斎こそは、闇斎の没後、その意の深奥をうかがい得た唯一の学者と言わねばならない。

（九） 山崎闇斎に於ける朱子学

闇斎は十五歳にして妙心寺に入り禅僧となったが、二十五歳の時に還俗して朱子学に転じ、四十歳前後より神道への関心は急激に顕緒（きんしよ）となる。五十二歳の時に、伊勢の大宮司河辺精長より『中臣祓』の伝を受け、さらに五十四歳の時には、吉川惟足より吉田神道の伝を受け、垂加霊社の神号を授けられている。闇斎が伊勢神道に学んだものは、「心神」という語を通して、わが心のうちに神が宿り、私どもの生命は神と一体（神人一貫）であり、天神の無限の生命の流れのなかにあつて滅びることがないという信念である。吉田神道に学んだものは、吉田家の神祖天児屋命（あめのやののみこと）が天神に天孫守護の大任を命ぜられたことに思いを致し、同じようにみづから日守木（ひもぎ）となつて、皇統の護持に任ぜんとする覚悟であつた。神人一貫の教えは、朱子学に深く沈潜して天人相関の理を求めていたことが助けとなつており、日守木の大任は、朱子学から学んだ道義・人倫の自覚、さらには国家・民族の自覚が影響している。しかし『日本書紀』の「神代卷」は、朱子学の儒教的合理主義をもつてしては、その記述の荒唐無稽さを理解するのは困難なことであつた。その限界を超えることができたのは、伊勢・吉田の両神道の伝を得て、日本の道を考えんとしたからであつた。確かに闇斎の学問は神儒兼学であるが、正確に言えば、神道の本質を明らかにするために朱子学を修めたと言ふべきものである。そのために神道史においては、闇斎の垂加神道を儒家神道として分類しているが、それは分りやすい安易な説明であつて、闇斎の神道者としての思索と実践の跡を見ると、闇斎の真の姿は求道者であつたというのが正鵠を得ている。

(一〇) 大山爲起著『倭姫命世記神葉抄』について

伊勢の神道五部書のひとつとして名高い『倭姫命世記』に初めて考定を施し、傍訓を訂し、かつその価値を認めて高く評価したのは山崎闇斎である。闇斎の晩年の門人大山ためおき為起(一六五一—一七二三)は、師のこの『世記』尊重の学風を継いで、さらに精密の考察を同書に加え、師のいまだ及ばざりしところを明らかにし、その成果を『倭姫命世記神葉抄』とした。同書は『世記』全篇にわたる註解としては初出のものである。為起は二十年という歳月をかけて、『世記』の調査研究とその註解の編述にあたり、後学のために、『世記』研究に対する新しい道を開いた功績は大きい。しかし留意しなければならないのは、全巻を貫いている著者の神道信仰思想である。為起は『世記』によって代表せられる古き伊勢神道の信仰に分け入り、その信仰を身をもって実践自証せんと努力しているということである。すなわち『神葉抄』は註解の書でありながら、それを越えて、神道信仰とはいかなるものであるかを伝える書物である。

(一一) 『若林強齋の研究』補遺——藤井左平太・梅津共軒・當舎修齋——

昭和五十四年三月、『若林強齋の研究』を刊行してから十五年になろうとしているが、ことに強齋の門人の伝に関する補正のごときは、いまだその資料の抜き書のまま手元に保存してきた。そのうちから三件を取りあげ、この一文を草して、『若林強齋の研究』の補遺とするものである。

(一二) 『望楠軒夜作』に思ふ

若林強齋の門人が、交代に師の雑話を筆録して一篇とした『望楠所聞』は、上下二冊から成っているが、その下冊の初めに、「正月十日、望楠軒夜作」と題して、七言の絶句と同じ題によって作った和歌とが並べて書いてある。この詩も歌も、強齋の学舎である望楠軒の実際を直叙しており、道を守って貧に屈しなかった強齋の風姿を想見することができる。

(一三) 寶曆の變

若林強斎最晩年の門人の一人に、宝曆事件の中心人物の竹内式部たけのうちしきぶ(一七一二—一七六七)があつた。それは若き桃園天皇の君徳御涵養のために、若き公卿たちが師式部の講ずる垂加思想をもつて、儒書および神書を天皇に追講したことが問題化したのである。これは保守的な公卿たちが、京都所司代に通報して処分を計つたのが事のおこりで、宮中における自己の立場が犯されると考えた吉田家よりの撰閑家に対するはたらきかけも影響している。しかし式部の説くところは、専ら天子の天子たる君徳の御涵養と、側近公卿たちに眞の忠義の何たるかを説くに限られていた。式部は決して挙兵討幕を説くものではなく、それにまた当時の京を囲む幕府の態勢もそれを許すものではなかった。ただ言えることは、闇斎の神道説(垂加神道)がすでに当時の宮廷内の一つの流れをなしていたということである。

(一四) 寶曆變餘響

西依成斎にしより(一七〇二—一七九七)、名は周行、通称は饑兵衛、肥後の人。九十六歳の長命を保ち、強斎なきあと、小野鶴山(一七〇一—一七七〇)とともに、学舎望楠軒を守り、幕末維新に向けて、尊皇思想運動に大きな影響を与えた。成斎の揮毫にかかわる書幅のうち、「月色江声共一楼(月色・江声 ともに一楼—晩唐の詩人雍陶の『宿嘉陵駅』の末句)」には、九十二歳の老齡にて師強斎の創設した望楠軒を守る成斎の孤独の心境を見ることができ。もうひとつの「自天祐之(天よりこれを祐く)——『易』の大有の卦、上九の爻辞」には、天祐を受くべき天子の出現を願う成斎の尊皇の微意を察することができる。

(一五) 川島栗齋所講『論語講義』について——崎門朱子學概説——

近江の天津崎門学者川島栗齋の『論語講義』(写本七冊)は、和漢古今の諸説をひろく探り、そのとるべきをとつて固陋の態度がなく、まことに親切公平である。しかしその講義の淵源をなせるものは山崎闇斎の言であり、依拠とし根底としているものは浅見綱斎・若林強斎両先学の講義である。栗齋は初め奥野寧斎に学び、のちに寧斎の師西依成斎に師事した眞摯の学人であつた。寧斎・栗齋もそうであつたが、神儒兼修は若林強斎の望楠軒の流れをくむ天津

崎門学派の特色で、栗斎の門人であった上原立斎に幕末の勤皇家梅田雲浜（一八一五——一八五九）が従学したのは、偶然ではなかったのである。

（一六） 山鹿素行の神道説——『中朝事實』成立考——

山崎闇齋（一六一八——一六八二）と同時代の学者で、同じく儒者であつて神道に心を注ぐようになった山鹿素行（一六二二——一六八五）が、何を契機としてその転回を成したかを考えることにより、闇齋の同じ転回の理由を考える助けたらしめんとしたのが、「山鹿素行の神道説」である。素行は寛文五年、四十四歳のときに『聖教要録』を著して朱子学を批判したため、翌年赤穂へ配流されることとなった。その際に死罪もあるべきかという生死の関門に直面するという体験を持つに至った。赤穂にあつてさらに自身の生命の根源に深く思いを致し、ここに日本人として民族の歴史を回想し、そこに自己の樹立の道を見出したことが、神道思想への転回をなした原因であつて、それが寛文九年、四十八歳のときに成立した『中朝事實』として開花結実するのである。その『中朝事實』に、北畠親房の『職原抄』・『元元集』・『神皇正統記』の影響が見受けられ、『日本書紀』を読む際に大きな力となったものと思われる。

三

著者は『浅見綱齋の研究』（昭和四十五年、神道史学会）・『若林強齋の研究』（昭和五十四年、同上）・『山崎闇齋の研究』（昭和六十一年、同上）という崎門学研究の三部作を世に問うておられる。さらに闇齋研究の三部作として、『山崎闇齋の研究』に引きつづいて、『續山崎闇齋の研究』（平成三年、神道史学会、臨川書店発売）を刊行し、今回の『續々山崎闇齋の研究』を上梓されたのである。

『山崎闇齋の研究』では、著者は主に書誌学的な調査を積み重ねたうえで、闇齋がその神道説（垂加神道）を樹立するためには、朱子学への沈潜がいかに重要な契機をなしているかを明らかにされた。『續山崎闇齋の研究』では、

著者は閻斎の神道説の究明に専念され、北畠親房や^{わたらのふよし}度会延佳の著書が閻斎の神道開眼を助けており、特に伊勢神道への沈潜を通して、靈魂不滅の確信を持ち、みづから日守木^{ひもろぎ}となって、皇統の守護と国土の保全を無窮に願わんとしたことを明らかにされた。すなわち著者は靈魂に對する閻斎の思想を究明することに主眼を置かれたのである。

三部作の最後をしめるものが本書『續々山崎閻斎の研究』であり、十六篇の論文で構成されていて、内容についての大体はすでに紹介した通りである。著者が「緒説」で述べておられるように、(一)より(九)までが本書の正篇であって、なかでも(一)より(五)までが本書の核心となるものである。(二〇)より(一六)までは統篇とも言うべきもので、(二〇)より(一五)までは門下門流によって、閻斎の神道がどのようにに継承せられ発展し実践せられたかを考察したものである。最後の(一六)は閻斎の神道転回の理由を考える助けとするために附け加えたものである。

著者は『山崎閻斎の研究』正・續・續々を書きついで行かれることによって、「その博大なる生涯の学問思索は、晩年最後の著書なる『中^{なか}・臣^{とみ}・祓^{はら}・風^{ふう}・水^{すい}・草^{そう}』にそのすべてが凝結せられているという事実であった。閻斎の学問の目的も方法も、そしてその結論もこの一書に凝結している」ということを身をもって理解された。その際の『中臣祓』を理解するための眼目となるものが、「三種神器」・「猿田彦神」・「心神」等であって、それらが本書で考察の対象となったものである。

『山崎閻斎の研究』の書評(九州大学、「中国哲学論集」13、一九八七年)、つづいて『續山崎閻斎の研究』の書評(同17、一九九一年)、さらに今回も書評をさせていただいて、特に感銘をうけたのは著者の執筆の姿勢である。「山崎閻斎と『古語拾遺』(51頁)において、三種の神器の論争に関し、「学者が神器であるという本質を忘れ、学問のための学問という名に隠れて、いたづらに新説を樹て、自説を説くことのみに走る」という弊害を指摘しておられること。また「大山爲起著『倭姫命世記神葉抄』について」(249頁)では、「吉見幸和の『五部書説弁』や、伴信友の『倭姫命世記私考』の出現となり、(中略)神道そのものが、信仰としてではなく、考証考古の対象として考えられるようになり、合理実証のみが学問であるとする弊が生じて来た」と憂いておられる。そのため著者は「緒説」(7頁)において、「故に私の執筆した各篇は、いわゆる学術論文とは、執筆の目的も態度も異なるであろう」と明言し

ておられるが、著者の大部な三部作を読めば、厳密な書誌学的調査を積み、精密な思想的考察を尽くしておられることはすぐに了解できる。それなのにあえて今日の学界の研究方法を批判されるのは、「今日、論文と証するものに多い、科学的記述とか実証的研究を看板として、古人を自分と同列に引きさげ、第三者の目をもって、これを冷たく観察し評価する態度に同感できない」（「緒説」7頁）からなのである。

著者が問題提起しておられるのは、何のための学問かということであろう。明治から平成の今日に至るまで、学問が科学的、実証的研究という名のもとに、何を欠落してきたかを教えてくれるのが、崎門の学者たちの学問の姿勢である。今日の学者は思想や信仰を身をもって実践自証せんとする姿勢が忘却せしめられているのである。

（一九九五年（平成七年）四月三十日発行）
神道史学会（臨川書店発売） 九五七九円